



すみくらまりこ

夜露

まるで満ち足りたかのように、
露という露が
円い月を映して、
葉面に安らいでいた、
はな ^{そうび} , 花 ^{こぼ} , 薔薇の上に ^{こぼ} , 零れるまでは。

シルエット
, 影絵

ストローク
葦の ^{ストローク} , 運筆は迷いなく、
好きに伸び、
好きに折れる。

背負う月の湖は

一面に銀の ^{さざなみ}, 細波。

稲妻

大地が轟く

天が光る。

凜と咲く、

この花を照らせ。

命は負けない。

埋火

灰は

火に優しい。

時が

愛に

優しいように。

花の影

花よ、
美しすぎるのは罪だ。
一点の疵もなく、
咲くのは悪だ。
そっと花影に触れる。

石筍

「この一滴が
こう成るのか」
異形の石筍は
静かに云う。
「お前の一滴は何だ」

ドリーム
 , 夢

水売りの少年よ、

うつむ
 , 俯くんじゃない。

貧しさは恥ではない。

「ドリーム
 , 夢って食べられるの？」

硬貨を握りしめて君は訊く。

白波

波に終わりはない。

寄せ引く想いに、

言葉かがやく。

人の世に

かくも深い言の海。

蓮

泥から生まれたというのに、すっと立つ誇り高い御身。その逞しし茎は地上よりまっすぐに伸び、水の上に届く。そのひろやかな葉は、水に支えられて浮かび、小さな露を遊ばせ大きな露を水へ返そうとゆるやかに揺れている。

蓮よ。あなたを愛しいなんてとても言えない。花なのに、あなたを拝したく思う。朝、未明。静けさがひとときわ張りつめる瞬間にあなたは輝かれるから。

蓮よ。あなたを悲しそうなんてとても言えない。花なのに、あなたを信じたく思う。夕、薄明。静けさがひとときわ安堵する時間にあなたは微笑まれるから。

たった四日間の命のあと・・・

やがて時がくれば、泥の中で厳しく他者を避けておられたあなたは、もういい、もう十分だと思われたら、眠るように端々から溶け、泥そのものになられる。

あなたにお暇をいえないわたしは、いつまでも光る泥を見つめて佇んでいる。そして水底を思う。輪廻。再び生きる準備を果たしているあなたと再びまみえるその日を。

飛天

幸せ香る飛天の住処。須弥山（しゅみせん）の天辺を見よ。

天女が突き上ぐる風を待っている。

ふさやかな天衣（てんね）、ふくやかな霊芝雲（くも）、天翔（あまが）けに何の不足もない。遙かバーミヤンに新造仏（ほとけ）はおはす。

はや、宇（そら）に満ち、地にこだまする天人の唸哨（ちやるめら）、蕭（しょう）、笛、角、鼓。天童らは嬉々と蔓殊沙華を降らす。

天女は舞いつつ、宙（とき）を忘れて・・・千五百歳が過ぎた。

仏が身上を察し、お像をそっと抜け出たのはある新月の夜だった。

その直後、異教の徒は三が日かけて粉々に砕いた。

それを知った天女は地に泣き伏した。悲しい飛天は飛べないのだ。

すると瑞雲は地にまで降りてきて、仏の声のがのたまわく、

「愛しい純な天女よ、心して聴け。像（かたち）は魂（こころ）の器なのだ。

香林でわれを待て。時は来る。いつかきっと戻って来む。」

祈りの島（三月十一日の夜に）

にいつま
、高島田のおみなの胸が
傷ついている、
息ができないでいる、
日本列島。

高島田のおみなの心臓が
弱っている。
息ができないでいる。
日本列島。

頭から、足のさきまで
痛みに耐えている、いま。

被災したひとびと、
それを想うひとびと。

街がなくなり、
村々がなくなり
いったい何からすればいいのか。
道がなくなっている。

いま、
祈りだけが島を包んでいる。
励ましだけが島を包んでいる。
そして暗闇の沈黙に耐えている。

花の祈り (四月二十日の夜に)

春を終えた ^{うっ} , 鬱 ^{こん} , 金 ^{こう} , 香 (ちゅーりっぷ) が

須弥壇の床へ

挙身投地している。

散らばる花びら、

あらわな花芯、

そして伸びた茎

辛い春を終えたひとが

須弥壇の床へ

挙身投地している。

散らばる思い出、

あらわな暮らし、

そして伸びたからだ。

不空縋索観音さまの

指先が震えてみえた夜

どの糸もひとり残らず

掬うため濡れてみえた夜

「なにごとにも徒労にあらず」

口元にことばが現われた夜

春を終えた ^{うっ} , ^{こん} 鬱 ^{こう} , 金 , 香 (ちゅーりっぷ) が

須弥壇の床へ

拳身投地している。

花ですら

祈る島

日本列島、

二〇一一年の春の夜は

こんなにも深く-----

光る石の恐怖 (二〇一一年四月二十九日の夜に)

二百年前ウィリアム・ブレイクは
いみじくも「甘い科学」と言った。

マリーが見つけた光る石は

破壊と放射能の恐怖と引き換えに

何をくれたのだろう。

ヒロシマ、ナガサキ、チェルノブイリ、

スリーマイル、フクシマの地に

何をくれたのだろう。

大きなものから壊していく爆発。

小さなものから倒れていく放射能。

いっそこれらが幻視であれば。

「真の信仰とは、不都合な事実に

目を閉じることでなく

自明の理に目を開けることだ」

ブレイクのことばが暗闇に輝く

光る石のように。

マーブリング

水の上（おもて）のアラベスク

砕け散れない波がしら。

華麗な渦は巻ききれず

哀しく弧（あーる）に逃げてしまう。

ああ、

自らの色を譲らず、

堪えきれぬその強さ、

嗚呼、

他の色を侵さず、

混ざらぬことの気高さ。

互いに溶けそうになりながらも

なお。

帆船

クリスチャン・ラディック号に一

重たげに沈む夕日があなたには似合っている。揺れる波間に垂直であろうとする帆柱。美しい均整。みなぎる帆。疾走を制するものは何もない。

船首には、紺青の衣をまとった女神アルテミス。波を切りながら、その表情はどこことなく硬い。そらは自然への畏怖か、それとも人間への不信か。悲話を繰り返し語る老人を探してこよう。彼はひとこと語ることだろう。「一度死んだ身じゃて・・・」

あなたは近づいてくる。半世紀前の戦禍から蘇った不死伝説があなたをなおさら強くする。恐れを知らないあなた。嵐の到来に笑みさえ浮かべるあなた。内から壊れる泡のようなわたしは、あなたが造る波、そのしぶきでも受けようと身を乗り出す。

花火

意を決して咲くのだから、放物線は描かない。まっすぐ天を目指し、力尽きたとき、花
芯に火が届くだけだ。上へ上へ、連鎖して咲き競う無機の花。

きらびきの硫黄（ゆわう）は炸裂する。よろこびの紅（べに）はしだれゆく。名残の青
火（あお）は円弧（あーる）を描き、紅味を帯びて消えてゆく。

紛れなく円（まる）らかに咲いた花。もう危うさの硝石は尽きてしまった。暗黒の海の
面に墜ちていくのに、ときめきを装うどんな色があるだろう。

銀富士

下界では生者必滅。

樹海では生活船が難破する。

—全存在をもってわれに対峙せよ—

御身の声は誰にも届かない。

たぎりを深く留め、

自らを鎮めまします御身よ。

月姫は銀の光を御身に揮発させ

そっと体熱を奪う。

すると、

御身は天を仰ぎ、

そっと目を閉じるのだ。

ペガサス

これではない。

これはあの波ではない。

至福へ導き

私を滅ぼす波ではない。

これでもない。

これもあの波ではない。

虚しさを閃光で充たす

無上の波ではない。

待たれるのは

大洋の彼方から駆けてくる

大うねりの波頭、

幻の白馬。

待たれるのは

生命の海から

無窮の宇宙（そら）へ

翔ぶというペガサス。

海女

波よりも怖いのは
心の弱さだ。

空を蹴れ！
深く深く潜るために。

片手に余る獲物のために
命は担保されている。

籠では赤子が泣いている。

地を蹴れ！
早く早く浮かぶために。

片手に余る獲物のために
命は担保されている。

夫が舟で待っている。

長く長く磯笛を鳴らせ。
そなたの肺を潰さぬように。

涙のワジ

風が泣いている。

オアシスに刻まれている筋は

涸谷（ワジ）だ。

風が巻いている。

金色の太陽に蔭るのは

涸谷（ワジ）だ。

河が流れていた

遠い昔。

今は砂が砂を食む。

水よ、一粒の水よ。

草よ、一本の草よ。

生きとし生けるものよ。

「失った時は戻らない」

DIOGEN pro culture magazine & DIOGEN pro art magazine -ISSN 2296-0929; ISSN 2296-0910

Publisher Einhorn Verlag, Kusnacht, Switzerland

E-mail: contact_editor@diogenpro.com / WWW: <http://www.diogenpro.com/>

地球のつぶやきを耳に、

わたしは涙の跡を見る。

PR

DIOGEN pro kultura

<http://www.diogenpro.com>

NEKOPIRATI